©2016 国立大学法人北海道大学

第15回 FSP 欧州全体報告書

一般教育演習（フレッシュマンセミナー）：グローバル・キャリア・デザイン

訪問国：フィンランド・エストニア　　訪問期間：2016/9/6-9/20

©2016 国立大学法人北海道大学

目次

ファースト・ステップ・プログラム（FSP）とは? 2
メンバー紹介 3
日程表 5
フィンランド共和国 8
エストニア共和国 11
準備授業 13
事後授業 14
企業・組織・協定校・大学訪問
　北海道大学欧州ヘルシンキオフィス 16
　ヘルシンキ大学 Viikki キャンパス 17
　Aalto University 18
　日本航空株式会社 19
　JETRO 20
　Business Oulu 21
　在エストニア日本国大使館 22
　Tallinn University 23
　国連大学（UNU-WIDER） 24
　Mapvision 25
　フィンランド気象庁 26
　在フィンランド日本国大使館 27
　University of Oulu 28
　Demola Oulu 29
自由課題活動 30
第 15 回 FSP 欧州メンバーへのアンケート 32
ギャラリー 35
終わりに・謝辞 37

©2016 国立大学法人北海道大学

ファースト・ステップ・プログラム（FSP）とは？

ファースト・ステップ・プログラム（FSP）とは、「一般教育演習（フレッシュマンセミナー）：グローバル・キャリア・デザイン」として開講している授業科目です。科目を開発する段階では、海外に向けての第一歩という意味を込めて「ファースト・ステップ・プログラム」という名称を使っていたので、現在、通称を「FSP（First Step Program）」としています。

この授業では、海外協定校での授業体験や学生との交流、国際機関や国際的に展開する企業の現場見学、およびそこで働く方々との対話などを短期間に体験する機会を提供します。（HP より抜粋）

〇応募資格（一部）

・北海道大学の学部 1・2 年生
・高い国際志向を持ち、在学中に他の海外留学プログラムに参加したいと思っている学生
・必要最低限の英語力を持っていること（TOEIC400 点、TOEFL iBT41 点、英検準 2 級レベル以上、またはこれらと同等以上の英語力が必要）
・訪問国での活動に心身ともに支障がない学生　など（公式パンフレットより抜粋）

〇私たち記録広報班が考える FSP の特徴

FSP は、その名前からもわかるように、このプログラムを第一歩として、参加者が北海道大学内外の海外留学プログラム（交換留学、語学留学、海外インターンやボランティアなど）への志向を高め、グローバル、さらには“グローカル”にも活躍できる人材になることを目的としている。そのため、海外へ留学することの意義を知り、今後の進路選択の参考となるような情報を収集できるように構成されている。

常に 20 人程のグループで活動する、事前・事後の授業があり引率者が同行するためサポートが充実しているなど、本学で実施されているほかの短期留学とは異なる体験ができるのが特徴だ。

FSP は訪問先の地域によっていくつかのコースに分かれており、2016 年夏季は第 15 回 FSP 欧州の他に、第 16 回 FSP アジアが開講された。（詳しくは公式パンフレットや HP を参照）

©2016 国立大学法人北海道大学

メンバー紹介

梶川 彩香
1 年生
総合理系

輿水 千幸
2 年生
教育学部

江頭 春樹
1 年生
総合理系

山縣 宏史
1 年生
総合理系

小林 拓夢
1 年生
文学部

三林 洋登
1 年生
経済学部

佐藤 丈生
1 年生
理学部

堀井 純太
1 年生
総合理系

加藤 くるみ
1 年生
医学部

時永 万音
2 年生
理学部

古見 愛恵
1 年生
法学部

橋本 菜々
1 年生
工学部

©2016 国立大学法人北海道大学

米谷　菜那
1 年生
文学部

樫村　尚宏
2 年生
理学部

藤川　礼奈
1 年生
法学部

小野　瑠生哉
1 年生
総合理系

阿部　紗采
1 年生
文学部

西田　冴
2 年生
文学部

小野　輝也
1 年生
工学部

松本　侑希保
1 年生
医学部

東城　佑樹
2 年生
工学部

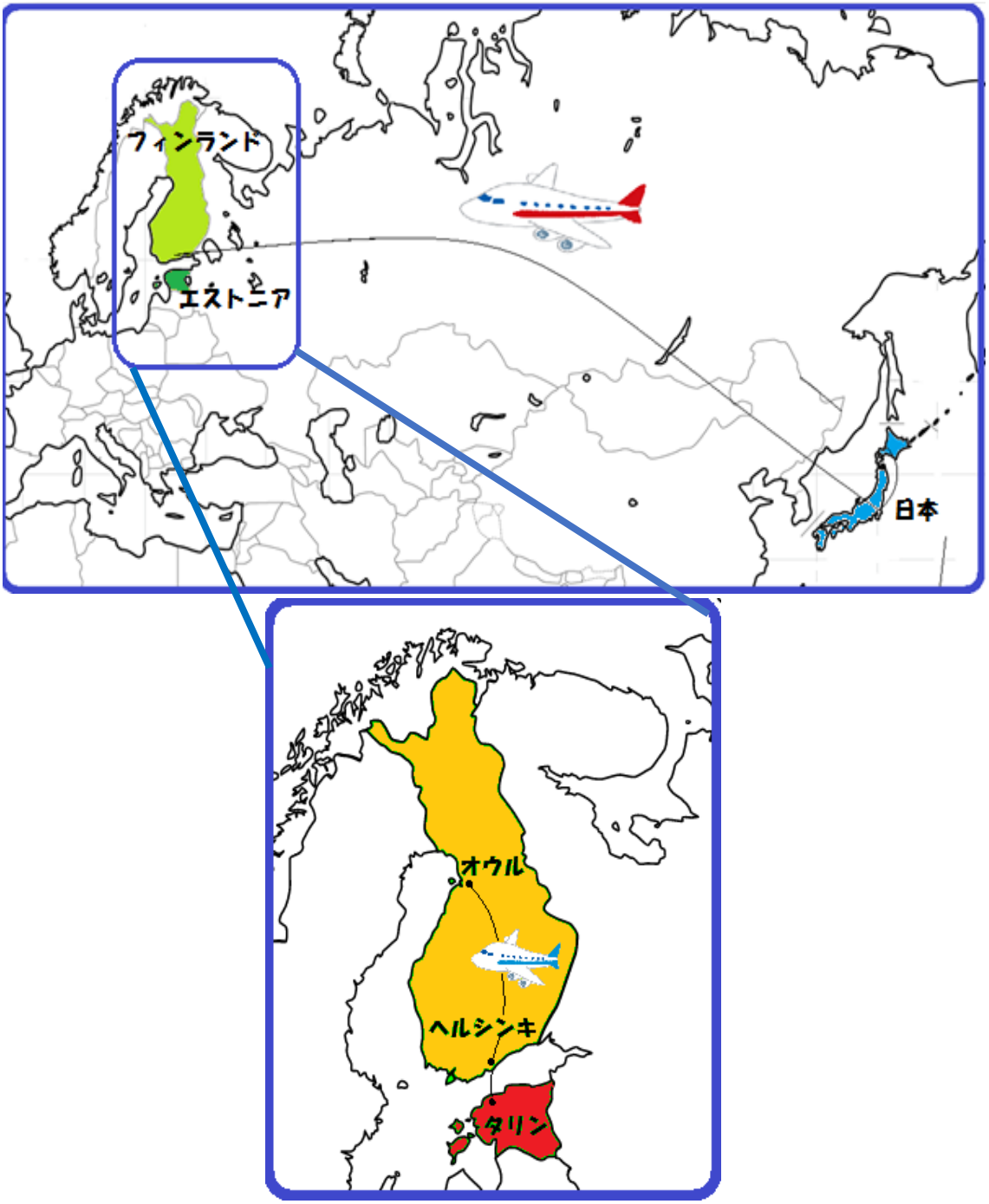
©2016 国立大学法人北海道大学

第 15 回 FSP 欧州　日程表			
	日付	都市	行程
1	9 月 6 日(火)	札幌から ヘルシンキへ	7:55-9:30 JL3040 新千歳⇒成田 10:30-14:30 JL413 成田⇒ヘルシンキ ヘルシンキに到着後、電車でホテルに移動
2	9 月 7 日(水)	ヘルシンキ	9:00-12:00　北大欧州ヘルシンキオフィス訪問、ヘルシンキ大学キャンパスツアー 午後（1 時頃ヘルシンキ中心部を出発）　ヘルシンキ大学 Viikki キャンパス訪問（バイオサイエンスポスドク研究員竹下大介さん他訪問含む）とアアルト大学訪問（2 グループに分かれて行動）
3	9 月 8 日(木)	ヘルシンキ	企業・組織訪問①　9:00-11:00 日本航空ヘルシンキ支店松倉様 企業・組織訪問② 11:15-12:45　JETRO ヘルシンキコレスポンデント前薗様 企業・組織訪問③ 14:00-15:30　ビジネス・オウル内田様 15:45-17:00　FSP 欧州振返りミーティング①（終日ヘルシンキ大学会場にて実施）
4	9 月 9 日(金)	ヘルシンキから タリンへ	7：30-9：30　ヘルシンキからタリンへフェリーで移動 企業・組織訪問④　10:30-12:00 在エストニア大使館阿藤様（タリン大学にて講話） 12:00-17:00　タリン大学訪問（講義及び日本文化専攻の学生との交流）
5	9 月 10 日(土)	タリンから ヘルシンキへ	午後 3 時頃まで　タリンにて自由課題活動 16：30-18：30　タリンからヘルシンキへフェリーで移動 ホテル到着後、ヘルシンキにて自由課題活動
6	9 月 11 日(日)	ヘルシンキ	終日　自由課題活動（ヨウツェノ・オピスト成人学校の学生【日本語学習者】との交流・3 グループに分かれて行動）

©2016 国立大学法人北海道大学

7	9 月 12 日(月)	ヘルシンキ	企業・組織訪問⑤　10:00-11:30 国連大学世界開発経済研究所 (Ms. Annett Victorero, Dr. Yoko Akachi) 企業・組織訪問⑥　14:00-16:00 Mapvision 本多様
8	9 月 13 日(火)	ヘルシンキから オウルへ	企業・組織訪問⑦　9:00-11:00 フィンランド気象庁鶴田様 企業・組織訪問⑧　13:00-14:30　在フィンランド日本国大使館中張様、野口様 15:30 頃　電車でヘルシンキ空港へ移動 19:00―20:30　AY373 ヘルシンキ⇒オウル （オウル空港到着後専用車でホテルへ移動）
9	9 月 14 日(水)	オウル	9:00-17:00　オウル大学訪問（講義及び日本学科の学生との交流）
10	9 月 15 日(木)	オウル	9:00-17:00　オウル大学にてフィンランド―日本シンポジウム参加
11	9 月 16 日(金)	オウル	午前　自由課題活動 12:00-17:00　オウル大学にてフィンランド―日本シンポジウム参加
12	9 月 17 日(土)	オウル	終日　自由課題活動 フィン―日協会の方々と市内散策ツアー、菓子作りイベントに参加
13	9 月 18 日(日)	オウル	9:00-12:00 FSP 欧州振返りミーティング②（事後の授業①） 午後：自由課題活動
14	9 月 19 日(月)	オウルから ヘルシンキへ ヘルシンキから 日本へ	企業・組織訪問⑨　9:00-10:30　Demola (Mr. Silven) 12:00 頃　空港へ向けて出発（ホテルから専用車でオウル空港へ移動） 14:10-15:15 AY366 オウル⇒ヘルシンキ 17:15 JL414　ヘルシンキ⇒成田
15	9 月 20 日(火)	成田から札幌へ	8:55 成田到着 成田到着後、専用車で羽田空港へ移動 12:30-14:00 JL515 羽田⇒新千歳 14:30 頃　新千歳空港にて解散

©2016 国立大学法人北海道大学



日本とフィンランドの位置関係（上図）
フィンランドとエストニアの拡大図（下図）

©2016 国立大学法人北海道大学

フィンランド共和国

基本データ

人口	約 549 万人
首都	ヘルシンキ
面積	33.8 万 km²
言語	フィンランド語、スウェーデン語
民族	フィン人
通貨	ユーロ
日本との時差	7 時間（渡航期間中はサマータイムを実施しているため 6 時間）
9 月の平均気温	10.7℃（ヘルシンキ）
日出、日没	日出：6:26 日没：20:08　　（いずれも 9/6）

地理

面積は日本よりやや小さいくらいであるが、人口密度は日本（337 人/km²）の 20 分の 1 以下である。国土のほぼ全てが北海道と同様に亜寒帯に属しているものの、国土の約 25%が北極圏に属しているだけあり、9 月の平均気温がヘルシンキで 10.7℃である（札幌は 18.1℃）。これは札幌の 10 月の平均気温よりやや低い程度であり、渡航中はかなり寒い日もあった。また国土の約 3 分の 2 が森林であり、19 万もの湖を持つ「森と湖の国」として有名。その水質は良く、水道水を直接飲める数少ない国（15 カ国ほど）の 1 つである。地形はほぼ平坦であり、北部に位置するハルティ山の 1324mがフィンランドの最高峰である。

（右図：フィンランドの湖と白夜
http://www.finland.or.jp/public/default.aspx?nodeid=46057&contentlan=23&culture=ja-JP より転載）

©2016 国立大学法人北海道大学

歴史、文化など

サンタが住んでいたり、ムーミン一家がいたり、美しい自然があったりするため考え難いが、第 2 次世界大戦時にはソ連と 2 度戦争をしている。いずれも最終的には不利な講和条約を結ばされるが、戦力で圧倒的な差があったのにも関わらず独立を守った。2 度目の戦争ではやむを得ずナチス・ドイツの支援を受けたため枢軸国と見なされ、イギリスに宣戦布告を受けた事もある。戦後は驚くべき発展を遂げ、世界トップクラスの通信インフラ設備・携帯電話会社であるノキアをはじめ、多くの IT・ベンチャー企業が集まる。物価は高く、また消費税（付加価値税）は世界第 7 位の 24%である。

フィンランド人留学生曰く、フィンランド人はシャイな国民性を持つらしい。しかし、それを否定するような内容が書かれている本もある。また学校では、生徒と先生との関係が対等であり、親しい先生とは名前で呼び合う人もいるほどだという。

そんなフィンランド人であるが、祭り好きで、個性豊かなお祭りや世界大会が多く行われている。

- 携帯電話投げ世界選手権
- エアギター世界大会
- 奥様運び選手権大会
- ゴム長靴投げ世界選手権大会
- サウナ世界選手権大会（全身火傷で死者が出た
  め現在は中止）
- 掃除機投げ選手権

（右図：携帯電話投げ世界選手権の様子
http://wondertrip.jp/travelhack/558.html より転載）

サルミアッキ

フィンランドでは湖で獲れる魚やライ麦を使った料理が多い。ライ麦で作られたフィンランドの主食の 1 つ、「ルイスレイパ」やライ麦のパイ生地で魚肉を包んだ「カラクッコ」がその典型。その他にも、ソーセージ、トナカイ料理、森で取れるベリーを使ったパイ、ザリガニ料理などがある。またフィンランド人はコーヒーが大好きで、年間約 12kg 消費する。これは世界で 2 番目の消費量である。（2015 年 6 月時点）

さらに、黒色の飴「サルミアッキ」は有名。なぜ有名なのかは食べてみると分かると思うので是非試してみてほしい。

©2016 国立大学法人北海道大学

参考文献・web サイト・協力者

「青い光が見えたから[16 歳のフィンランド留学記]」（高橋絵里香　講談社　2007 年 12 月 3 日）
「フィンランドの歴史」（デイヴィッド・カービー　明石書店　2008 年 10 月 28 日）
「主な地点の平均値」（気象庁　閲覧日：2016 年 7 月 17 日）
http://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/monitor/mainstn/nrmlist.php
「過去の気象データ選択」（気象庁　閲覧日：2016 年 7 月 17 日）
http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/nml_sfc_ym.php?prec_no=14&block_no=47412&year=&month=&day=&view=
「日の出・日の入り　-高精度計算サイト」（CASIO　閲覧日：2016 年 7 月 17 日）
http://keisan.casio.jp/exec/system/1253955558
「人口推計　平成 28 年 4 月報」（総務省統計局　2016 年 4 月 20 日　閲覧日：2016 年 7 月 17 日）
http://www.stat.go.jp/data/jinsui/pdf/201604.pdf
「フィンランドについて：環境」（フィンランド大使館　2013 年 2 月 8 日　閲覧日：2016 年 7 月 17 日）
http://www.finland.or.jp/public/default.aspx?nodeid=46057&contentlan=23&culture=ja-JP
「フィンランドのコーヒー文化」（フィンランド大使館　2016 年 2 月 3 日　閲覧日：2016 年 7 月 17 日）
http://www.finland.or.jp/public/default.aspx?contentid=340015&nodeid=41264&contentlan=23&culture=ja-JP
「世界の消費税（付加価値税）の税率の高い国」（外務省　閲覧日：2016 年 7 月 17 日）
http://www.mofa.go.jp/mofaj/kids/ranking/shohizei.html
「人生で 1 度は参加してみたい世界の 13 のクレイジーなお祭り」（Wondertrip　2016 年　閲覧日：2016 年 7 月 17 日）
http://wondertrip.jp/travelhack/558.html
「フィンランドのおいしいもの」（フィンランド観光局　2016 年　閲覧日：2016 年 7 月 17 日）
http://www.visitfinland.com/ja/kiji/finland-no-oishiimono/
“Hullut kesäkisat saivat jatkoa – pölynimurinheiton Suomen mestaruus ratkesi hurjalla kaarella”
（YLE 社　2016 年 2 月 7 日　閲覧日：2016 年 7 月 17 日）
http://yle.fi/uutiset/hullut_kesakisat_saivat_jatkoa__polynimurinheiton_suomen_mestaruus_ratkesi_hurjalla_kaarella/9000034

取材協力：Tuulikki Puominen 氏
写真提供：松尾明彦氏

（参照：第 15 回 FSP 欧州総務企画班（小野（瑠）、小野（輝）、西田、堀井、古見、梶川）作成「Finland & Estonia」しおり）

©2016 国立大学法人北海道大学

エストニア共和国

基本データ

人口	約 134 万人
首都	タリン
面積	4.5 万㎢（日本の約 9 分の 1 で、その半分が森林）
言語	エストニア語（英語、ドイツ語などを話せる人が多い。 母語ではなく英語が通じる国、世界第 4 位。日本は 26 位）
民族	エストニア人約 7 割　ロシア人約 3 割　その他　ウクライナ人、フィンランド人など
通貨	ユーロ
日本との時差	7 時間（渡航期間中はサマータイムを実施しているため 6 時間）
9 月の平均気温	11.3℃（タリン）
日出、日没	日出：6:28 日没：20:08　（いずれも 9/6）

地理

地形は平坦で、最高標高は 318m しかない。首都のタリンは中世から港町として栄え、現在でもフィンランド湾に接する主要都市として数えられる。

気候は緯度の割には暖かく過ごし易い。夏には 30℃、冬には-20℃にまでなることもあるが、私たちが訪れた 9 月の気温はだいたい 8℃～15℃、平均 10℃であり、札幌の 10 月の平均気温とほぼ同じである。

歴史、文化など

エストニア共和国は、北ヨーロッパの共和制国家で、EU そして NATO の加盟国であり、第二次世界対戦においてソビエト連邦から独立したバルト三国の一つである。

その歴史は 1219 年にデンマーク人がタリン市を築いたことから始まる。その後、ドイツ騎士団、スウェーデン、ロシア帝国などの支配を受け、1918 年にロシア帝国より独立。しかし、第二次大戦中の 1940 年にソビエト連邦が占領する。その後、1991 年に独立を回復した。2004 年に NATO、EU に加盟している。2011 年からユーロの導入を始めた。このようにエストニア共和国は独立してから日が浅く、ソビエト連邦とナチス・ドイツによる占領と抑圧を受けた経緯から、マルクス・レーニン主義の象徴である「鎌と槌」と、ナチスのシンボルである「鉤十字」の使用と掲揚は、2007 年施行の法律で禁止されている。

また、IT 産業が発達しており、Skype を生んだ国として有名である。投票や納税もネッ

©2016 国立大学法人北海道大学

トを通して行われ、IT 技術者の数がヨーロッパ中でトップクラスに多い。人件費も安いため、多くの IT 企業が進出している。国際的にも IT 関係には強い影響力をもつ。子供には早くから IT 教育を行い、国際学力調査では欧州の上位に位置する。

物価もヨーロッパの中では安い。平均月収は日本円で 12 万円ほどであり、駅近 2LDK で 4 万円という物件もある。（札幌なら 7 万円くらいする。）

世界的にも IT の最先端を進む国であるが、その首都タリンの街並みは中世のようである。旧市街地は世界遺産に登録されており世界中から多くの観光客が訪れる。

（上図：タリン旧市街）

参考 web サイト

「THE WORLD'S TOP 60 COUNTRIES IN ENGLISH ACCORDING TO THE EF ENGLISH PROFICIENCY INDEX」

（The World Leader in International Education　閲覧日：10 月 16 日）

http://www.multivu.com/mnr/62435-ef-education-first-top-english-speaking-countries

「エストニア共和国」（外務省　閲覧日 10 月 16 日）

http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/estonia/

「エストニア」（駐日エストニア共和国大使館　閲覧日：10 月 16 日）

http://www.estemb.or.jp/jp/estonia

「エストニア」（Wikipedia 閲覧日：2016 年 10 月 16 日）

https://ja.wikipedia.org/wiki/エストニア

「過去の気象データ選択」（気象庁　閲覧日：2016 年 10 月 16 日）
http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/nml_sfc_ym.php?prec_no=14&block_no=47412&year=&month=&day=&view=

「日の出・日の入り　-高精度計算サイト」（CASIO　閲覧日：2016 年 10 月 16 日）

http://keisan.casio.jp/exec/system/1253955558

（参照：第 15 回 FSP 欧州総務企画班（小野（瑠）、小野（輝）、西田、堀井、古見、梶川）作成「Finland & Estonia」しおり）

©2016 国立大学法人北海道大学

第 15 回 FSP 欧州における準備授業
（全 5 回のうち 4 回は FSP アジアと合同）

第 3 回準備授業の様子

6 月の終わりから 8 月のはじめにかけて 6 講時（18:15~19:45）に、FSP に参加するうえで必要な情報の共有や海外研修のための様々な準備を行う準備授業が 5 回行われました。

第 1 回準備授業（6/29）では、授業の概要、各々の自己紹介や、班の結成などを行いました。

第 2 回準備授業（7/7）では、現・国際連携機構の石倉さんから FSP に向けた英語の学習方法や、現・国際教育研究センターの肖先生よりキャリア・デザインについての必要性や、その方法についての講義を受けました。その他、FSP メンバーの名前を覚えるために「記憶ゲーム in English」を行いました。

第 4 回準備授業の様子

第 3 回準備授業（7/14）では、異文化とは何か、異文化コミュニケーションとは何かについて学ぶために、自分と共通点を持つ仲間を集めるというアクティビティをしました。

第 4 回準備授業（7/21）では、プログラムでお世話になる方々の紹介がありました。ここで、北大欧州ヘルシンキオフィス所長の成田吉弘先生や、第 8 回 FSP 欧州に参加し、この秋からオウル大学に留学している北海道大学薬学部の大畑月香さんから、アドバイスや体験をお話しいただきました。また、安全管理と危機管理について学び、自ら行動できるようになるためにグループごとにケーススタディを行いました。

第 5 回準備授業（8/4）では、プレゼンに対しての良い聴衆とは何か、効果的なフィードバックとは何かを学んだ後、プレゼン班が現地の学生に向けて発表する予定のプレゼンを予行演習という形で行い、残りの学生がフィードバックを行いました。

第 5 回準備授業の様子

©2016 国立大学法人北海道大学

事後授業（全３回のうち２回は FSP アジアと合同）

第１回事後授業の様子

第１回事後授業は海外研修期間の後半（9/18）に行われ、北海道大学欧州ヘルシンキオフィスの伊藤早苗さんからご自身の経歴についてや、「日本の大学で学ぶ」ことと「海外の大学で学ぶ」ことの違いについて教えていただきました。例えば日本の大学では、手取り足取り指導してくれる教授が多いのに対して、海外の大学ではまず、自分で動かないと教授の方からは何もしてくれないとのことでした。海外の学生からは、「日本人の学生は自分からは何もしようとしない、赤ん坊みたいだ。」といわれることもあったそうです。このお話しを聴いて、海外に留学する・しないに関わらず、自分から行動に移すことのできる人間になれるよう積極的に物事に取り組んでいこうと思いました。その後、各自が海外研修を通して得たこと・学んだことを発表し、全体で共有しました。

第２回事後授業の様子

第２回事後授業（10/11）は帰国後に行われました。この日はまず、第 15 回 FSP 欧州と、第 16 回 FSP アジアの記録広報班による、帰国報告会に向けたプレゼン発表をリハーサルとして行い、他のメンバーからプレゼンに対するフィードバックをもらいました。これらのフィードバックを基に、帰国報告会では私たちが FSP を通して得たこと・学んだことを伝えられるように努力していこうと思いました。次に FSP を通して気づいたこと・確認したことや、海外研修を終え、自分たちのこれからの進路やその進路に向けて自分たちは何をしていけば良いのかを、第 15 回・第 16 回のメンバーがグループに分かれて話し合い、発表しました。発表を聴いて、海外研修中の学びから、自分自身のこれからの生き方について考えている人がたくさん見受けられたように思いました。

第３回事後授業（10/20）が帰国報告会となります。報告会に来てくださった皆様に、研修を通して私たちが何を得、何を学んだか、十分に伝えることができればと思います。

©2016 国立大学法人北海道大学

企業・組織・協定校・大学訪問

©2016 国立大学法人北海道大学

北海道大学　欧州ヘルシンキオフィス　副所長 サロマ・テロ様

ヘルシンキ 9/7

文責　山縣

訪問先概要

北海道大学欧州ヘルシンキオフィスは 2012 年 4 月にヘルシンキ大学構内に設立された、北海道大学にとってヨーロッパで初めての拠点である。海外オフィスの主な仕事は、北海道大学へ留学する学生のサポートや、北海道大学生の海外留学支援など、受入れ・派遣双方の学生の研究留学を促進させ、大学間の連携を強めることである。また、欧州ヘルシンキオフィスとしての主な仕事はフィンランド国内の大学だけでなく、ロシアを含めたヨーロッパの大学と北海道大学をつなげ、大学間の関係を強化することである。

＜参考 URL＞Hokkaido University Helsinki office　http://www.hokudai.fi/　他

訪問内容

サロマさんには、海外オフィスや北大欧州ヘルシンキオフィスの業務内容や、ヨーロッパ内にある日本の各大学の海外オフィスについて紹介していただきました。欧州ヘルシンキオフィスは北海道大学の海外オフィスとしては北京オフィス（2015 年 9 月 11 日をもって運用停止）、ソウルオフィスに次いで 3 番目に設立されたもので、ヨーロッパの大学と北海道大学の架け橋として、受入れ・派遣両学生の支援や、産学官連携活動の支援などを行っているそうです。お話しの後に欧州ヘルシンキオフィス内を見学させていただき、さらにヘルシンキ大学構内やヘルシンキ大学周辺の案内をしていただきました。

所感

サロマさんのお話しを聴いて、国内だけでなく世界で大学同士がつながることは、学生が留学しやすくなることや、研究がより進みやすくなることから、非常に重要であることがわかりました。また、ヨーロッパだけでも日本の大学との連携をとっている大学が数多く存在することに大変驚きました。ヘルシンキ大学を見学したことで、これから海外留学をするかどうか考えるにあたって、良い判断材料になったと思います。周辺の案内をしていただいた中で、館内が美しいフィンランド国立図書館の見学が最も印象に残っています。またヘルシンキ大学の図書館では、学生ひとり一人が皆物事に真摯に取り組んでいて、私も見習わなければと思いました。

サロマさんのお話しを熱心に聴く学生たち

北大欧州ヘルシンキオフィス前にて

©2016 国立大学法人北海道大学

ヘルシンキ大学 Viikki キャンパス

ヘルシンキ　9/7

文責　江頭

訪問先概要

フィンランドで歴史、学力ともに１位のヘルシンキ大学は、11 学部と 21 研究所が、4 つの大きなキャンパスと、20 ヵ所の敷地に分散している。そのなかでも Viikki キャンパスは市の中心から北に約 7km の所にあり、生物科学部、薬学部、獣医学部、農林学部、バイオテクノロジー研究所などがある。

＜参考 URL＞University of Helsinki　https://www.helsinki.fi/en

訪問内容

Viikki キャンパスでは、バイオサイエンスポスドク研究員の竹下大介さんに案内していただきました。はじめに開放的な図書館に連れて行っていただき、その後ご自身の研究について説明していただきました。また、たくさんの研究室を訪れるラボツアーをしていただき、専門的な神経系統のニューロサイエンスや発生生物学、細胞生物学について３名の日本人研究者の方々にお話しを伺いました。実験室・研究室にお邪魔し、実験用のマウスの状態や、ショウジョウバエを実際に見せていただきました。最後に、キャンパス内で馬を治療する動物病院を訪問し、責任者の方に英語で院内を案内していただきました。（竹下さんに通訳していただいたおかげで内容を把握することができました。）

所感

特に目の研究が興味深く、立体視する能力の研究が抗うつ剤の研究につながって、一見無関係だと思われる研究でも、意外なところで役に立つのだと驚きました。そして、網膜の細胞についての研究であっても、数学や統計学、プログラミングの理解など生物学だけではない幅広い知識が必要であることを知りました。一方向からではなく様々な方向から研究対象を見て、研究を進めていくことが重要なのだと気づかされました。これからの大学での勉強も、自分の興味ある部分だけではなく様々な分野の知識についても学ぼうと思いました。そうすることで将来役立つこともあると思います。また、馬の病院では、実際に診察・治療されている馬の様子や治療室の見学など普段入ることのできないところへ案内していただき、貴重な体験をさせていただき感激しました。

Viikki キャンパス外観

バイオセンター前にて

©2016 国立大学法人北海道大学

Aalto University

ヘルシンキ　9/7

文責　東城

訪問先概要

Aalto University は、2010 年 1 月 1 日にヘルシンキ工科大学、ヘルシンキ経済大学及びヘルシンキ美術大学が統合して生まれた大学であり、その名前はフィンランドの有名な建築家 Alvar Aalto の功績を称えるために付けられた。ここでは主に経済学や工学、芸術学を学ぶことが可能で、多くの企業と提携することにより学生の積極的な社会進出を促している。

＜参考 URL＞Aalto University　http://www.aalto.fi/en/

訪問内容

Aalto University は、学生の社会進出への援助が活発であり、数々の企業と提携して在学中及び卒業後の学生のサポートをしています。中には在学中の学生の活動に出資してくれる企業もあり、学生が研究しやすいシステムが作られています。また、大学内に存在する Student Unions は学生のみで構成されており、学生のボランティアを募り、学生のサポートに取り組んでいます。研究施設も充実しており、学生の取り組みを最大限支える設備が整っています。例えば、家庭生活を向上させる商品開発に取り組んでいる工学部のある研究室では、研究室全体がモデルルームのようになっており、学生たちはその空間の中で様々な考えを巡らせることができます。このように、Aalto University では様々なシステムが導入されており、学生にとって効率的に活動が出来る場所となっています。

所感

工学部の学生にとってこれほど自分の研究をやりやすい大学は他にないだろうと思います。私は現在工学部に所属しておりますが、整った学習システムと研究設備にとても心を打たれ、このようなところで自由に研究がしてみたいと感じました。また、工学部に限らず経済学や芸術学においても、学生が社会進出しやすいシステムが揃っていると感銘を受けました。日本の大学にも、Aalto University のような制度を取り入れて、より学生が積極的に社会を創造していけるような世界を作ってほしいと思います。

キャンパス見学中

熱心に講義を聴く学生たち

©2016 国立大学法人北海道大学

日本航空株式会社　ヘルシンキ支店総務セクションマネージャー 松倉弘明様

ヘルシンキ　9/8

文責　樫村

訪問先概要

日本航空株式会社（JAL）は 1951 年に会社が設立されて以後、1954 年に日本初の国際線（東京～ホノルル～サンフランシスコ）の開設、1965 年の JAL パックの販売、1993 年のマイレージプログラムの導入、2007 年のグローバルアライランス「ワンワールド」への加盟など日本の航空事業を支え続けている企業である。2010 年に経営破綻したが、それまでの経営を見直し、部門別採算や JAL フィロソフィの導入などにより 2012 年には再上場。2010 年、2012 年、2013 年、2015 年には定時到着率（遅延 15 分未満で到着した便の率）で世界 1 位を獲得している。ヘルシンキ支店は 2013 年に欧州のゲートウェイ拠点として新設され、現在 13 名のスタッフで運営。＜参考 URL＞JAL の沿革　https://www.jal.com/ja/outline/history.html

講話内容

松倉様の講話では、会社概要、ヘルシンキ支店の役割、JAL グループ社員全員が共有する意識・価値観・考え方である「JAL フィロソフィ」についてお話しを伺った後、海外で働くということ、学生時代にすべきこと―――“「なりたい自分」を想像してみる”、”地味な努力を積み重ねる”、”「無限の可能性」を信じる”―――を交えてお話しいただきました。

所感

今回の FSP 欧州においても移動に利用させていただき、心地よいサービスを提供していただいた JAL、その徹底されたサービスの深奥くにある考え方、JAL フィロソフィについてお話を伺うことができ、とても興味深かったです。また、その JAL フィロソフィや、JAL の経営再建の立役者であり、京セラ創業者の稲盛和夫氏の理念についてのお話では、一見当たり前と思われていることの重要さを再確認することができました。他にも、これからの学生生活やキャリア形成において有益なアドバイス、考え方をたくさん教えていただき、とても充実した時間を過ごすことができました。

講師の松倉様

ご講話後にお土産をお渡ししました

©2016 国立大学法人北海道大学

JETRO　ヘルシンキコレスポンデント 前薗香織様

ヘルシンキ　9/8

文責　江頭

訪問先概要

貿易・投資促進と開発途上国研究を通じて、日本の経済・社会のさらなる発展に貢献することを目指している。事業内容としては、対日投資の呼び込み、日本製品の輸出促進、日本企業の海外展開の支援などがある。海外の拠点としては 55 カ国に 74 の事務所があり、欧州のコレスポンデントは 7 人いる。ヘルシンキコレスポンデントでの業務としては、日本からフィンランドに来る企業等に情報を提供したり、フィンランド企業からの日本投資の支援を行うことである（大規模投資となるときには、ロンドンにあるインベストチームが直接担当する）。

＜参考 URL＞JETRO プロフィール　https://www.jetro.go.jp/jetro/profile.html　他

講話内容

ご自身が日本で勤務されていたころは当時の男女間の労働に関する不平等があったこと、またそれでも自分の正しいと思う道を突き進み、外国にある日本企業に転職し、新たな人生の第 1 歩を踏み出したことなどをお話いただきました。また、自分の将来についてマインドマップを作成するアクティビティを行っていただき、FSP 欧州参加者はお互いの将来の夢やそれをかなえるにはどのようなことが必要か、について共有しました。

所感

前薗様には人生の転機において、お金ばかりを優先せず自分のやりたいことをとことん追求して、とにかく飛び込んでみることも大切であると教えていただきました。また、前薗様がおっしゃっていた「人生はバラ色」という言葉に端的に表されているように、自分自身の未知なる可能性を信じ、自分の道を突き進むということも忘れないようにしたいと感じました。また、マインドマップの作成をすることで今まで漠然としていた私の将来の展望について再考することができました。ここから、自分の大学生活の中で何をしていけばよいか明確にすることができました。

講師の前薗様

マインドマップ作成の様子

©2016 国立大学法人北海道大学

Business Oulu　Coordinator 内田貴子様

ヘルシンキ 9/8

文責　山縣

訪問先概要

オウル市の企業で、オウル地域（北オスロロボニア）におけるビジネスサービスプロバイダーとして、雇用の創出をミッションとした公的組織。企業の成長(国際化含む)、企業誘致、起業に関わるあらゆるビジネスの段階を支援。サポートは無償提供。ツーリズムにも力を入れており、オウル市の PR も行う。また、オウル市でのイベントやカンファレンスのアレンジも行う。オウルにおけるワンストップ産業支援組織。

＜参考 URL＞Business Oulu　http://www.businessoulu.com/en/company-services.html

講話内容

内田様は Business Oulu の数少ない外国人社員として働いており、オウル市内の企業・学校機関などの組織と、日本の企業・組織のビジネスマッチング、訪問先アレンジなどのコーディネートが主要な業務だそうです。内田様からは、人生に無駄なことは一つも無く、限られた人生の中で出会う人々は貴重な財産であることを教えて頂きました。また、願っていれば、自然とその方向に進むものであるとのことで、内田様ご自身、様々な職を経験し、その過程で自分に適した仕事・自分のやりたい仕事像とは何かを考えたそうです。今の仕事は非常に自分に適していて、自分がやりたかった仕事であると仰っていました。

所感

内田様のお話しの中で、自分のチャレンジに遅いも早いもなく、自分のタイミングで行動するときが、そのチャレンジの適齢期であるという言葉が非常に印象に残り、行動することの大切さを知ることができました。また、昔からやっていたことがこれからにつながるかもしれないというお言葉から、今までやってきたことが無駄にならないように、これからの将来に関して、慎重に考えていければと思いました。Business Oulu での仕事内容について事前に調査したときはあまり理解できなかったのですが、ご講話を拝聴して、世界中の組織間の連携を促すことはこれからの時代において、非常に重要になってくるのではないかと感じました。

講話中の内田様

最後は学生代表からお礼をお伝えしました

©2016 国立大学法人北海道大学

在エストニア日本国大使館　一等書記官 阿藤隆司様

タリン　9/9

文責　樫村

訪問先概要

大使館は、外交の重要な拠点として各国の首都に設置され、その国に対して日本を代表している機関である。主な業務内容として、その国の政務、経済等の情報収集、広報文化活動、途上国においてはODA（政府開発援助）の推進、邦人援護活動、知的財産保護支援・日本企業支援等の仕事がある。在エストニア日本国大使館は、エストニアの首都タリンに設置された大使館である。

＜参考URL＞外務省　在外公館の仕事　http://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/zaigai/shigoto.html

講話内容

阿藤様には、まず、大使館の業務や日本とエストニアを含む外国の関係について伺いました。具体的には世界の在留邦人129万人のうちエストニアには110人の在留邦人がいて、一方、在日外国人223万人のうちエストニア人は500人いること、日本の外務省の職員は5,800人で世界第8位であることなどを伺いました。その後、在エストニア大使館の職員の方々が行っている、現地の中高生に向けた日本、日本とエストニアの関係を紹介するプレゼンテーションを私たちに向けても行ってくださいました。最後に、外務省の職員として世界各国で働いてこられたご自身の経歴とともに、その国に行ったことで初めてわかることがあるということをお話しいただきました。

所感

日本に住んでいるだけではあまり意識することはなかった大使館について、詳しくお話しを聞くことができてとても興味深かったです。特に、広報文化活動の一つである現地の中高生に向けた日本を紹介するプレゼンテーションを実際に拝聴したことで、日本を代表する機関が海外の人々に日本をどのように紹介しているのかを知ることができ、自分が日本を紹介する際の良い参考になりました。また、”その国に行ったことで初めてわかることがある”というお話は、ニュースや伝聞のみでその国を認識していた私にとって、認識を改めさせてくれるとても有意義なものでした。

講師の阿藤様（写真左）によるプレゼンテーション

©2016 国立大学法人北海道大学

Tallinn University

タリン　9/9

文責　山縣

訪問先概要

Tallinn University はタリン市内で人文科学分野の研究が最も盛んで、さらにエストニアで 3 番目に大きい公立大学です。学生数は約 9,000 人であり、400 人を超える研究者と講師が所属しています。Tallinn University は人文科学と社会科学の分野に強く、教員養成・教育研究にも力を入れ、さらに言語科学学部東洋学科では 2000 年から本格的な日本語講座が開かれています。また、30 ヵ国の 55 大学と大学間協定を結んでおり、世界の約 400 の大学とエラスムス・プラスと呼ばれる留学支援プログラムの協定を結んでいます。

＜参考 URL＞Tallinn University　https://www.tlu.ee/en/university

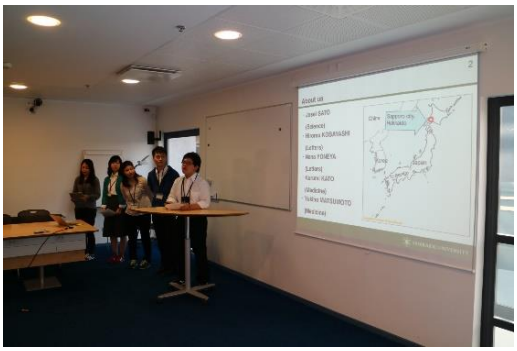
訪問内容

Tallinn University 構内で昼食をとった後、Dr. Alari Allik による、方丈記や鴨長明に関する講義があり、次に Ms. Maret Nukke による能楽の歴史的な変化に関する講義をしていただきました。その後、プレゼン班の学生による、四季を通じた北海道大学での学生生活に関するプレゼンテーションがあり、発表した学生は皆、緊張した面持ちではありつつも、堂々とプレゼンに臨んでいました。最後に、Tallinn University の学生との交流があり、学生の日本語力の高さに非常に驚きました。さらに学生の 1 人に、タリン市内の案内をして頂き、タリンについてより深く知ることができました。

所感

日本文化に関する研究を聞いて、私は日本から遙か離れた異国の地で、伝統的な日本文化の研究が盛んに行われていることを知り非常に驚きました。また、日本文化がエストニアに深く浸透し始めてきていることを知り、深く感銘を受けました。私自身、方丈記や能について詳しく知らなかったので、今回のご講義を聞いて日本にはこのような素晴らしい文化が存在していることに改めて気づかされました。今回の訪問で私は自分の国と向き合い、自分の国の文化について自分の中で知らなかった一面を見出すことができたと思います。

Dr. Alari Allik による講義の様子



FSP プレゼン班による発表

©2016 国立大学法人北海道大学

United Nations University the World Institute for Development Economics Research (国連大学世界開発経済研究所)　Ms. Annett Victorero, Dr. Yoko Akachi

ヘルシンキ　9/12

文責　樫村

訪問先概要

United Nations University the World Institute for Development Economics Research（略称 : UNU-WIDER）はヘルシンキで 1985 年に設立された、国連大学初の研究・研修センターである。事業内容は、世界最貧の人々の生活状態に与える構造的変動についての学際的な研究と政策分析、フォーラムを開き専門家の交流をはかることで、力強く平等で環境的に持続可能な成長をもたらす政策の提言を促すこと、経済社会的な政策立案の分野の能力強化と研修の推進などがある。設立には、ノーベル経済学賞受賞者のアマルティア・セン氏が創始者の一人として関わっており、彼をはじめ複数のノーベル賞受賞者が関与している。

＜参考 URL＞国連大学世界開発経済研究所　http://jp.unu.edu/about/unu-system/wider#overview

訪問内容

まず、Ms. Victorero から、UNU-WIDER の説明、最近の研究として対外援助に関する研究と対話などを行っていること、2014 年から 2018 年までの目標として transformation（変容）、inclusion（包括）、sustainability（持続性）を掲げていること、国連大学の構造などについてお話しいただきました。次に、Dr. Akachi からご自身の研究内容についてお話しいただきました。Dr. Akachi は公衆衛生について、特に健康と発展について調査されています。途上国における子供の致死率を低下させるために予防接種やアフリカの母親への衛生教育が必要であることなどを伺いました。その後、私たちに向け、「自分自身で疑問を持ち、決意を持つこと」「自分にとって本当に重要なものに対し情熱を持って取り組むこと」「自分の人生を自分で決めること」「何が自分のやりたいことなのか考えること」というメッセージをいただきました。

所感

世界の貧困、5 歳未満で死ぬ多くの子供たち――日本ではあまり実感できない、世界が突き当たっている問題に取り組んでいるお二方からお話を聞くことで、世界に対する自分の視野の狭さを実感しました。また、子供のときの環境や経験が大人になったときにも影響し、それは次世代にも影響をもたらすというお話はとても興味深く、現代を生きる私たちはそのような点でも次世代に責任を持たなければならないと思いました。

講師の Ms. Annett Victorero

講師の Dr. Yoko Akachi

©2016 国立大学法人北海道大学

Mapvision Ltd.　Business Area Director　本多狩武様

ヘルシンキ　9/12

文責　江頭

訪問先概要

優れた品質と効率を兼ね備えた生産プロセスを可能にする、最先端の解決策を提供することを目指している、ヘルシンキに本社のある企業。車の構成部品を検査する、製造ライン上に組み込まれた検査機械（Quality Gate）の製造販売と、それにまつわるソフトウェア開発などの関連事業を行っている。2016 年には、日本のミツトヨと、戦略的パートナーシップ契約を締結した。

＜参考 URL＞Mapvision　http://www.mapvision.fi/en/

講話内容

Quality Gate は、複数のカメラで部品を撮影することにより、設置の角度、穴の幅などを三次元計測で詳細に調べることができるという測定機です。ご講話の中では、Quality Gate のすばらしさが良くわかるビデオも見せていただきました。現在、新しいビデオを作製中で、もうすぐ HP に掲載されるとのことです。最後には、同じ敷地内にある工場内を見学させていただき、Quality Gate を間近にみることができました。ご講話では、本多さんは自らの生き方を例に挙げて、（今までとは違う新しい）環境に恐れず、飛び込むということは貴重な経験だと教えて下さいました。また、海外就職を考えているならば、海外赴任を意識して、将来について明確な目標をじっくり考えてみることが大切であるとおっしゃっていました。

所感

Quality Gate は画期的な製品で、世界的に浸透する日も遠くないように感じました。また、本多さんが教訓としてあげられた、「具体的で明確な目標を持つ」というお言葉は特に深く私の胸に刺さりました。なぜなら、私はこれまで特に人生における目標設定もせずに漫然と生きてきたような気がしていたからです。本多さん曰く、具体的で明確な目標設定には最低でも 1 週間の時間を要するそうなので、時間を十分に取れる学生時代に自分の将来像を明確にしたいと思いました。

講師の本多様

講話を聞く学生たち

©2016 国立大学法人北海道大学

フィンランド気象庁　鶴田青希様

ヘルシンキ　9/13

文責　山縣

訪問先概要

正式英名称は Finnish Meteorological Institute、略称 FMI。フィンランド国内の天気予報・気象警報・注意報・自然災害（積雪・雪解け・自然火災など）の情報発信や、国内外の気象観測及び、気象学の研究が主な事業となっている。また、大気質・気候変動・地球観測・海洋・北極圏の研究も行っており、成果を Web ホームページ上の Science news や国際学会誌などに掲載している。さらに年に一度、研究や活動について英語でまとめた Atmos magazine も出版している。

＜参考 URL＞フィンランド気象庁　http://en.ilmatieteenlaitos.fi/

講話内容

鶴田様のご講話では、将来を見据えて私たちに身につけてほしい能力として情報収集能力・自立性・多様性の三つについてお話しを伺いました。その中で、ご自身の海外での経験を通じて、海外で暮らすためには、その国の言語や生活習慣といった文化を受け入れることが必要であり、また日本にいる時以上に日本人としての責務を全うしなければならないと教えていただきました。加えて、海外で働くということはまず国内外の人とのかかわりが必要となってくるため、英語はもちろん現地の共通言語も習得することで、コミュニケーションがとりやすくなりスムーズな人間関係につながるのだということを学びました。

所感

鶴田様のお話しを伺って、海外で働くことの素晴らしさと難しさを改めて感じました。また、苦手なものは排除せず、様々なことに取り組むことが大切であるというお話しを聴き、ものごとに積極的に取り組むことの重要性を感じました。海外で暮らすということは、日本人としての業務や責務を日本にいるとき以上に全うしなければならないということであると知り、普段の生活から自分自身の行動を見直していこうと思いました。

講話中の鶴田様

気象庁内を案内して頂きました

©2016 国立大学法人北海道大学

在フィンランド日本国大使館　三等書記官（広報文化班班長）中張有紀子様
専門調査員（経済班）野口絵美様

ヘルシンキ　9/13

文責　樫村

訪問先概要

在フィンランド日本国大使館は、フィンランドの首都ヘルシンキに設置された大使館である。大使館については在エストニア日本国大使館の訪問先概要を参照。

＜参考 URL＞外務省　在外公館の仕事　http://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/zaigai/shigoto.html

講話内容

ご講話では、まず中張様から外務省や大使館を含む在外公館についてのご説明がありました。ここでは、大使館で働くには様々な採用ルートがあることや、外務省入省から在外公館勤務になるまでの流れなどを学びました。また、中張様は外務省の研修地であった英国で大学院に進学され学位を取得されたとのことで、社会人を経験してからの大学院進学は、自分のやりたいことがより明確になっているので学部卒業後にすぐに院に進学するのとはまた違った利点があると教えていただきました。その後、野口様より「視野を広くもっていろんな選択肢があることを知ろう」というテーマでお話をしていただき、ご自身の NGO や国連専門機関で働かれていた経歴を基に、”自分の原点、原体験を見つける”、”自分の限界を勝手に決めない”、”たくさんの選択肢に目を向ける”、”無理をしない”、といった多くのメッセージをいただきました。

所感

大使館で働くためには、単に国家公務員試験によって外務省に入省して、そこから派遣されるだけでなく、野口様のように専門調査員といった専門性を持った人材の募集があり、様々な道筋があることを初めて知り、驚きました。また、お二方からいただいたメッセージはどれも納得でき、心に響くものでした。特にお二方のご経験についてのお話の後にお聞きした「人の生死にかかわること以外は大きな問題ではないので悩みすぎないで欲しい」という言葉は、些細なことも深刻に考えすぎてしまう自分にとって、生きることが楽になる言葉でした。これからは考えすぎず、無理しすぎずに精一杯生きていこうと思いました。

講師の中張様（右）、野口様（左）

学生代表からお土産をお渡ししました

©2016 国立大学法人北海道大学

University of Oulu

オウル　9/14~9/16

文責　山縣

訪問先概要

1958 年にフィンランド 2 番目の国立大学として創設された、世界最北端に位置する総合大学である。大学は北極圏から約 200km 南側にあるため、北極研究に関して非常に主要な役割を果たしている。また、国際協力に重点を置いており、国外 50 以上の大学と協力協定を結び、2015 年の時点で約 1,300 人の留学生が在籍している。フィンランド国内の大学で唯一日本に法人格を有する組織を設置している大学である。

＜参考 URL＞オウル大学について調べよう　http://shingakunet.com/rnet/kaigaidaigaku/europe/032/

訪問内容

〇9 月 14 日

大学構内の案内をしていただいた後に、University of Oulu と北海道大学の学生が交互に、互いの大学を紹介し、オウル大学の学生たちはオウル市の紹介やおすすめの名所についてプレゼンテーションをしてくれました。大学内で昼食をとった後、FSP 欧州プレゼン班の学生が日本の教育制度についてプレゼンテーションをしました。その後いくつかのグループに分かれ、フィンランドと日本の教育制度について議論・意見交換し、最後にはそれぞれのグループで発見したことを全体に向けて発表しました。また、途中の休憩時間には、折り紙を一緒に折ったり、絵を書いて当てるゲームなどのレクリエーションを通して学生交流をし、親睦を深めることができました。

〇9 月 15 日・16 日

15 日と 16 日の 2 日間を使って、「Interaction, Influence and Entanglement 100 years of Finnish-Japanese Relations and Beyond」という、フィンランドと日本の 2 国の文化・建築物・歴史・経済などに関する研究発表が行われるシンポジウムに参加しました。シンポジウムでは、教授などの研究者だけではなく、博士課程の学生による発表もありました。このシンポジウムは発表・質疑応答ともに全て英語で行われました。シンポジウムに参加したことで互いの国のことについてより知見を広げることができました。

所感

学生交流では、フィンランドと日本の教育制度の違いについての議論を行いましたが、両国の制度に多くの違いがあることに驚きました。また、英語での議論であったので、日常会話とはまた違った難しさを感じました。シンポジウムでは、日本とフィンランドの研究者のお互いの国の建築・統計学・文学といった様々な面での研究発表をきいて、フィンランドから見た日本についても知ることができました。

グループに分かれての発表

シンポジウムでの様子

©2016 国立大学法人北海道大学

Demola Oulu　Mr. Pekka Silven

オウル　9/19

文責　江頭

訪問先概要

Demola は大学生と企業の間の相互創造プロジェクトを応援しており、Demola の使命は、学生と中小企業の仲介を行い、企業の見えない課題を外部の視点から発見することである。異なる専攻の学生を複数人集め、そこに企業の社員 1 名をチームのリーダーとしてではなくメンバーの 1 人として加え、課題解決のために試行錯誤を繰り返す。デモンストレーションによって内容が認められると、企業はその案を採用することができる。

＜参考 URL＞Demola ABOUT　http://www.demola.net/about

講話内容

Demola は下請け会社ではなく、発明の足場・学びの環境です。特に中小企業では、自社の社員だけでは視点は限られる為、新しいアイディア、またそのアイディアを実現させるため、常に新しい視点を必要としています。そのため Demola は企業と学生をつなぐ役割を果たしています。このような Demola についての説明の後、私たちは 5 つのグループに分かれ、それぞれのグループが各自で選んだ 3 つのグッズを使って「何か新しいもの」を創造し、最後にそれについてのプレゼンテーションをするというアクティビティを行いました。発表する内容は、①この製品のターゲット（ユーザー)、②ニーズ（消費者がその製品に求める利便性)、③その価値について、の 3 点でした。このグループワークを通して、Demola の業務の 1 つであるアイディアを創造する力の育成というものを肌で感じることができました。

所感

Demola で学生チームに求められることは、柔軟なアイデアを考え出せる才能があることだと伺いました。私は今回のグループワークを通して、どんなに意味のなさそうなものからでも、ものの見方次第で何かしらの価値を見出せるということを学びました。加えて、奇想天外で画期的な発明をするためには遊び心や、自由な発想を持ってみることも、大切だと感じました。

講師の Mr. Pekka Silven

グループワークの様子

©2016 国立大学法人北海道大学

自由課題活動

企業・組織・協定校・大学訪問がない時間は、事前に自ら設定した課題に自由に取り組む自由課題活動を行いました。この全体報告書ではその中でも、終日自由課題活動を行い現地の方とたくさん交流する機会があった 2 日間（11 日、17 日）を取り上げます。

○9 月 11 日（日）　ヨウツェノ・オピスト学院の卒業生の方々との交流（ヘルシンキ）

この日は、ヨウツェノ・オピスト学院で日本語を教えていらっしゃる中川由紀先生ご協力のもと、日本語・日本文化を勉強するヨウツェノ・オピスト学院の卒業生の方々に、フィンランドを紹介するツアーをしていただきました。ツアーは 3 つのコースに分かれて行われました。

コース 1 :「典型的ヘルシンキ観光とショッピング・グルメコース」

シベリウス公園にて

コース 1 はヘルシンキ市内をショッピングや公園散策、寺院・大聖堂巡りなどをして観光を楽しむコースでした。シベリウス公園、アラビアという食器のお店を訪れ、昼食にはカールファッツェルというカフェでビュッフェ、さらにデパート内でのお店巡りやムーミンショップ、ウスペンスキー寺院を訪れるなど、本当にたくさんの場所に連れて行ってもらいました。学院の方々はとても流暢に日本語を話しており、散策中も日本語で私達とたくさん会話をしてくださり、ご自身のことについてや、フィンランドでの生活について教えてれました。

コース 2 :「自然散策とサウナ体験コース」

ヘルシンキ市内のサウナの店

コース 2 ではヘルシンキ市郊外にあるヌークシオ国立公園に行った後、サウナに行きました。ヌークシオ国立公園では森や湖が数多く存在する自然豊かな景色を見ることができました。公園内を散策した後、バスに乗ってヘルシンキ市内に戻り、サウナを体験しました。サウナは住宅地の中にあり、日本の銭湯よりもずっとラフな感じがしました。フィンランドのサウナは日本のものよりもずっと暑く、温度計を見てみたら 110℃もありました。フィンランド人はサウナにずっと入っているのではなく、「入っては出て、入っては出て」を繰り返すのだそうです。

コース 3 :「歴史と文化の町―ポルヴォー観光コース」

©2016 国立大学法人北海道大学

コース 3 では約 800 年の歴史を持つフィンランドで二番目に古い街、ポルヴォーを訪れました。歴史的な木造の赤い倉庫群を廻り、ポルヴォーの歴史や文化について知ることのできるポルヴォー博物館、厳粛な雰囲気に包まれているポルヴォー大聖堂や小さくて可愛らしいチョコレートを作っているピニエ・スクラーテヘダス（小さなチョコレート工場という意味）を訪れました。ポルヴォーの街並みは絵画から飛び出してきたかのように美しく壮大で心が奪われ、非常に清々しい気持ちになりました。

ポルヴォーの街並み

３つのコースが終わった後、これらのコースの参加者合同で、ホテル近くのメキシコ料理店で食事会をし、日本やフィンランドの文化について語り合いました。

○9 月 17 日（土）　フィンランド―日本協会の方々との交流（オウル）

この日は、日本や、日本とフィンランドの友好関係に興味を持つ人々の友好協会である、フィンランド―日本協会の方々と交流をしました。まず、オウルの街を案内していただき、大きな公園や、かつての増水の痕跡などを訪れました。その後、Pulla（プッラ）というフィンランドの伝統的なシナモンロールのような甘いパンを皆で作りました。フィンランド―日本協会の方々と、手作りのプッラを囲んで談笑し、フィンランドの生活文化に触れることができて、非常に楽しい時間を過ごすことができました。

プッラづくりの様子

フィンランド―日本協会の方々と

©2016 国立大学法人北海道大学

第 15 回 FSP 欧州メンバーへのアンケート

海外研修期間中に今回の FSP メンバーにアンケートをとりました。その結果を紹介したいと思います。(結果に一部、修正・抜粋あり)

Q1.あなたの所属する学部は？

総合理系	5 人
工学部	3 人
理学部	3 人
医学部	2 人
文学部	4 人
法学部	2 人
教育学部	1 人
経済学部	1 人
合計	21 人

内訳　学年　1 年生：16 人　2 年生：5 人
　　男女　男：10 人　女：11 人
　　文理　文系：8 人　理系：13 人

Q2.FSP 欧州に参加した目的は何ですか？また、それは達成されましたか？

・自分の今後のキャリア(特に留学)について考えを深めるきっかけにしようと思ったから。
　→企業訪問などで留学体験や海外での研究のお話しをたくさん聞くことが出来、目的は達成されたと思う。
・海外に行って、海外とはどのようなものかを感じてくるため。
　→次回の留学に向けて、とても自信がついた。
・将来の方向性を考えるため。
　→明確な将来設計はまだできてはいないが、企業訪問を通じて概ね達成されたと思う。
・海外留学へのハードルを設定するため。
　→達成できた。
・将来像を描くため。
　→帰国してからもじっくり考えたいのでまだ達成されてはいない。

といった意見があげられました。全体的に「留学の前段階として海外に行ってみたかった」、「今後のキャリアについて考えるため」といった意見が多かったです。

©2016 国立大学法人北海道大学

Q3.参加する前に不安だったことは何ですか？また実際に参加してみて、それはどう変わりましたか？

・海外でコミュニケーションがとれるか不安だった。
　→オウル大学の学生との討論のときも下手な英語でも通じたので、少し自信になった。
・積極的に現地人と関われるかどうか。
　→英語がちゃんと通じて、話せたし外国の友達も出来て少し自信になった。
・参加者同士で仲良くなれるか心配していた。
　→長い時間一緒にいることでとてもいい仲間になった。
・自分の英語で意思疎通が可能なのか心配だった。
　→相手の方がわかりやすい英語で説明してくれたり、単語・ジェスチャーで、コミュニケーションをとることができた。しかし、なかなか伝わらなかったこともあり、語彙力をつけ、簡単な文章で自分の意志をわかりやすく、間違いなく伝えられるようになりたいと思った。

「自分の英語が伝わるか不安」、「語学力の不安」という意見が半数以上を占めていました。しかし研修を通して、現地の人と会話することで自信をつけた人が多く見られました。

Q4.研修先でもっとやっておけばよかったと思うことは何ですか？

・現地の人との会話
・事前学習
・班の活動や自分の活動などの準備
・自由課題活動の時間の使い方。計画をしっかりしないと無駄になる。

現地の人との会話をもっとしておけばよかったと考えている人が多かったです。次に海外留学をするときには雪辱を晴らしてもらいたいです。

Q5.FSP 欧州を通して身についたことは何ですか？

・コミュニケーション能力が向上した気がする。 英語を学ぶことに対する姿勢が変わった。
・将来の選択肢の幅が広がったこと。
・自分で考えて自分で行動する力
・様々な可能性に目を向ける視野
・「グローバルに働きたい」という目標に向けて、すこし成長したかなと思う。心の余裕みたいなものが生まれた。
・自分自身のことを深く考えることが出来るようになった。物事を整理し、タイムマネジメントを自力で出来るようになった。

コミュニケーション能力が向上した人や、自主性・積極性が向上した人がよく見られました。海外という環境で、精神的に成長した人が多いのではないでしょうか。

©2016 国立大学法人北海道大学

Q6.フィンランド・エストニアに来て良かったことは何ですか？

・フィンランドの人々の温かさを知ることができたこと。
・現地の学生さんと交流することがとても楽しく、これからも連絡を取れるような仲になれたこと。
・なにもかも違う文化のなかですごせたこと。
・異国で日々暮らして、得るものは沢山あったので人間的に大きくなれたこと。
・いろんな人と交流でき、日本との違いや自分の知らなかったことを多く気づくことができたこと。特に人の親切さには感謝している。

研修中の現地の方々との交流を通じて、仲良くなった人もいたようです。また、異国の地で2週間生活することで、メンバー全員が様々な経験を得て、人間的に成長できたことがわかりました。

Q7. FSP 欧州への参加を通して、自分のキャリア形成に一番有益だったものは何ですか？

・企業・組織訪問＆大学訪問
・色々な人のキャリアを知れて、自分の今後の生き方の参考になった。
・企業訪問でのお話を通して、自分のやりたいことをするためにフレキシブルに進路選択をしたいと考えるようになった。
・人生の大義を見失わなければどのような経路をたどっても良いというお言葉
・企業をまわり、好きな事をとことんやることに対する抵抗感が少なくなった。
・実際にその国に行かないとわからないことが多く存在するというお言葉

企業・大学・組織を訪問し、そこでのお話しから自分のこれからの生き方を学び、キャリア形成にとって非常に有益だと考える人が半数以上を占めていました。また、研修期間の終盤に行われた第 1 回目の事後授業における振り返りミーティングで、各メンバーが研修中に得た考えを聴くことが自分にとって有益だったと答えた人もいました。

FSP では多くの方々のお話しを聴き、多くの方々と出会い、交流し、様々な体験をすることで自分自身を成長させることができます。次の FSP に参加しようか迷っている方は、ぜひ申し込んでみることをおすすめします。頭でっかちにならず、まずは飛び込んでから考えてみましょう。それからでも絶対に後悔はしないはずです。

最後になりましたが、アンケートに協力してくれた参加者のみなさんにこの場を借りてお礼申し上げます。

©2016 国立大学法人北海道大学

ギャラリー

ここでは第 15 回 FSP 欧州メンバーの研修中のベストショットを、ジャンル別に紹介したいと思います。

○風景

オウルの公園の様子

オウルでの夕焼け

ポルヴォーの高台からの景色

タリン旧市街の教会

○人物

帰国後、成田空港にて

オウルにて FSP メンバーの誕生日パーティーの様子

©2016 国立大学法人北海道大学

ヘルシンキ大聖堂の前にて

ヨウツェノ・オビスト学院卒業生の方々と

スーパーで見つけたお醤油

スーパーの店棚

iittala のガラス製品

ポルヴォーでの昼食

©2016 国立大学法人北海道大学

終わりに

はじめに、この報告書に最後まで目を通していただいたことに感謝いたします。

私たち第 15 回 FSP 欧州の密度の濃い二週間は、一人の離脱者を出すこともなく無事に終了しました。他国の文化に触れ、海外で活躍する様々な分野の方々から貴重なお話しを伺い、仲間と語らい合うことによって、海外留学への志向を高め、さらには自分の人生を有意義に過ごすための設計図のようなものまで得られたような気がします。私たちがフィンランド・エストニアで過ごす時間は終わってしまいましたが、これからは FSP を通して受けた啓発をよく咀嚼し、First Step Program の名前通りこのプログラムを第一歩として、各々の自己実現のための行動へと移していきたいと思います。

謝辞

お忙しい中、私たちのためにご講話くださった企業・組織の方々や、私たちの訪問を快く受け入れてくださった各大学の先生方、また、私たちの拙い英語を辛抱強く聞いてくださった現地の学生の皆さんに感謝いたします。

更に、事前・事後の授業や海外研修、班活動の全てに渡って私たちの面倒を熱心かつ細やかに見てくださった国際連携機構の石倉香理さん、現地で自らの経験を踏まえて私たちに的確なアドバイスを何度もくださった北海道大学欧州ヘルシンキオフィスの伊藤早苗さん、アアルト大学、タリン訪問時、国連大学や在フィンランド日本国大使館において引率・同行してくださった北海道大学欧州ヘルシンキオフィス所長の成田吉弘特任教授他、FSP に携わっていただいた全ての方々に感謝申し上げます。

そして最後に、常に課題を共有し、助け合ってきた第 15 回 FSP 欧州の仲間に感謝します。

2016 年 10 月 20 日

第 15 回 FSP 欧州　記録広報班一同

©2016 国立大学法人北海道大学

MEMO

©2016 国立大学法人北海道大学

第 15 回 FSP 欧州　全体報告書

平成 28 年 10 月 20 日

編　　集　　第 15 回 FSP 欧州　　記録広報班

（山縣、江頭、樫村、東城、時永）

問合せ先　　北海道大学　国際連携機構　国際オフィサー室（国際交流課）

電話：(011) 706-8040/8032

Email：ambitious@oia.hokudai.ac.jp

Facebook：https://www.facebook.com/1ststepprogram

Twitter：https://twitter.com/FSP_Europe